

渡辺克己著



第十六章・王子町かいわい



## 第十六章 ● 王子町かいわい

【写真】 駄ノ原鋳物師の代表作と

いわれる法専寺の金仏

- ・ 取り逃がした繁栄
- ・ 小学校事始め
- ・ 荷馬車とハタ織り
- ・ タタラ踏み の女
- ・ 楽しい行事
- ・ お遍路さん
- ・ 大分ミカンの創始者
- ・ 初めて飛んだ飛行機

奥付け／デジタルブックについて

### 発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



駄ノ原鋳物師の代表作といわれる法専寺の金仏

## 取り逃がした繁栄

「電車道を海岸に移さんじゃったら、この町はいまはたいしたもんじゃったに」

王子町筋の年寄りは、こういつてくやしがる。

別大電車創設から大正十四年ごろまでチンチン電車がここを走っていた。あの狭い道の、北側寄りに軌道が敷いてあつて、走る電車は軒すれすれだった。だから電車にはねられることも、の事故もあつたし、荷馬車の馬が、しつくする電車に驚いて狂奔し、店先をめちやめちやにこわされる事故もときどき起こった。だから大正十年ごろ海岸に移転の話が起こったとき、堀川の町民は大反対だったが、王子町かいわいは冷淡で、むしろ移転に賛成する方が強かった。

もつとも最初は、電車軌道は動かさないうで道路を拡張したいという案を電鉄側は持っていたようで、堀川・王子・生石の長



昔の小学生（挿絵：田中 昇）

い町筋に内々当たつてみたが、土地を買収し、家を動かす補償費はたいへんなものになる。町民とうるさい折衝の必要もなく、波打ちぎわに欲しいままに新しい道路を達成した方が費用もずっと安くすむ。ということから移

転を断行したものだ。

将来の発展を見越して、当時の町民が犠牲的に電鉄の希望をいれていたら、なんて考えるのはいまだからいえること。当時の人に先見の明のないことを責めるのは酷というものだ。

明治年代、たぶん電車新設の計画があつてのことだろうが、一度町筋を大整備している。それまでは町筋はいまのように直線ではなく、もっと狭くてごみごみしていた。

町名も、王子町一丁目を豊久、二丁目を春日原、三丁目を表町。南王子町は一丁目から大原、裏中、大組と呼んでいた。王子町の町名に統一されたのは西大分町が大分町に合併されたのち、大正になってからだ。

田園地帯の駄ノ原の中では、この二つの町筋だけが町の形態をとっていた。その他は、農家が、ぽつりぽつりと散在していたのである。大正になつても春日町一帯など、広々と田畑が横たわり、畑の向こうに連隊の屋根が光つてみえた。

春日町小学校（当時は第二尋常小学校）が王子神社の境内から現在地に新築移転したのは明治四十四年。そのころは、春日町などの町名はなく、現在の春日校のあたりは駄ノ原の中の菖蒲田という区域だった。菖蒲田は、大友時代春日神社の社領と関係のある古い地名である。

## 小学校事始め

春日町小学校の誕生は明治八年。まだあのあたりを「駄原村」といつていたところで、良福寺のお堂を借りて創立した。そ

のときの学校名は駄原小学校。教師は野田部という人がひとりで三十数人の生徒を教えていた。

明治新政の夜明けとともに、まず国民教育の急務が叫ばれた。明治五年に太政官から学制施行着手の指令が出され、ついで学制がしかれた。現在の六三三制の教育改革が占領軍によって強行された終戦後の混乱もたいへんだった。しかしこれは義務教育の完全に普及している基盤の上のことだからしれたものだが、まだ教育というものは武士か上流の子弟が寺子屋に通うものであつて一般の生活には無関係のものと観念しているところに、学制発布で学校を作れ、こどもはみんな入学しろときたのだから、たいへんだ。

大分で最初にできたのは府内学校（現在の荷揚町小学校）で明治五年八月に浄安寺を仮校舎にして開設された。それから七、八年にかけて津留学校、萩原学校、山津学校、三川学校、羽田学校、白木学校、田浦学校、八幡学校、勢家学校、駄原学校などがぞくぞく開設されたのである。もちろんいずれも寺院などを間借りした仮校舎ばかりだった。

しかし一般の教育への関心は一朝一夕に高められるものではない。こどものある家には「オカミ（政府）の命命だ」といつて就学をすすめて歩かねばならなかった。それでも就学もれのこどもはたくさんあった。新入生も満六歳から十二、三歳までのまちまちの年齢で、中にはませた子もいたらしい。明治七年の「小学校規則」の中の罰則に「みだりに集会雑談、放歌吟詩等をなすもの、教場において喫煙をなすもの」という条文がみえている。まるでいまの高校生を取り締まるような文句だ。

明治七年に小物座町のフロ屋が男湯と女湯の看板を取り違えて出して物議をかもしたことがあったそうで、これも当時の人々の文盲のなせる結果だと、村上堂で出していた「大分一週新聞」に、大分町の副戸長をしていた秋月という人がこういう意味の一文をのせている。

「…不自由は知つていながら学ぶ人はいたつて少ない。こどもを学校にやるにも、いささかの入費をいとい、自分が学ぶにはすでにおそく、しかも家業の妨げになるのを心配する。ついに生涯文盲にて月日を送り後悔することが少なくない」

話がわき道にそれたが、駄原村の駄原小学校は、明治二十一年に勢家町、生石村、駄原村が合併して西大分町となったので、その翌年西大分小学校と改称して王子神社東側に校舎の新築にかかり、二十四年からここで授業を始めた。現在の位置（現春日校）に移ったのは明治四十四年。その数年前から師範学校の付属代用校になっていた。

## 荷馬車とハタ織り

明治、大正時代は、この町内一帯に荷馬車ひきを業とする人が多かった。

農業の専業では、しだいに狭ばめられていく耕作地に反比例する人口を養っていくことができなくなってきた。といって、なんの特色もない半農地帯では、その貧しさから脱出するてではなかった。

当時の大分周辺の人々の食生活はアワめしや麦めしが普通

だった。はき物は足なかぞうり（足の半分ぐらいしかない短いワラぞうりで、かかととは土についていた）をばたつかせていた。ちよつと上等が竹の皮ぞうり。南大分などの七島い生産地は七島くずで作ったぞうりをはいていた。

氏神さまのお祭りのときに、とっておきの米の飯をたき、モチをつき、親類縁者が集まって飲み食いをした。そのかわり親類側のお祭りのときは、こちらから押しかけて飲み食いするからあいこである。このお祭りの往来が親類のつながりを維持しているようなもので、行かないと「フウが悪い」から、しいて勤めなければならぬ義理もあった。しかし、こどもたちはこれが楽しみだった。最良の着物を出してもらって、二銭銅貨のおこづかいをにぎれば、このうえもない喜びだ。この日は足なかぞうりをぬぎ捨て、ヤツオリをチャラつかせて出かけたものだった。

こんな生活を少しでも向上させるには男は馬車ひき、女は日よう取りに出かけるしかなかったのである。

町の問屋の商品をいなかに運搬し、帰りは米麦や薪炭を積み出してくるのが馬車引きの仕事だった。このように往復とも荷のあるということは、もうけが倍加するわけで、竹田方面行きがその往復荷が最も多かった。だから「竹田行き」は「往復荷」の代名詞ともなり、竹田以外のところでも往復荷があるときは「きようは竹田行きじゃ」といつていた。

女のよなべ仕事にはハタ織りがあった。自家用のもめん着物を織るのは普通のことだ、たいいていの家に木製のハタ織り機があり、キーコ、ボタン、キーコ、ボタンの単調な音が、道

を歩いていても聞こえた。自家用のものを織るほかに、萩原もめんの下請けもしていた。「萩原もめん」というのは、東大分の萩原に盛んだったもめん織りのことである。問屋から糸をもらってきて織りあげると、いくらかの賃金になったのである。だから、王子町から生石町のかかり付近にかけて、紺屋が四、五軒あった。

## タタラ踏み の 女

王子町にはもうひとつ名物があった。いまの南王子町筋に多くあった鋳物屋である。町内の人はこれを「金屋（かなや）」と呼んでいた。王子町から生石町の現在の金屋橋ぎわまで、この「かなや」がとびとびにあった。

駄ノ原の「金屋」の歴史は非常に古い。「金屋」の中心は植木一族だが、この植木氏は、系譜によると、南北朝時代戦功によって足利尊氏から肥後植木の庄を与えられた郷士だった。のち宇佐八幡の到津氏に仕え、ここで鋳物の技術を修得し、さらに、大友に招かれて駄ノ原で鋳物業に従事した、とある。これが駄ノ原の鋳物の始まりで、当時は大友の士分の扱いを受け、兵器の鋳造を主にしていたものらしい。駄ノ原は大友氏の兵器廠だったわけだ。

大友滅亡後はナベ、カマ製造の「金屋」として定着したのだが、腕のいい鋳物師がいたとみえ、仏像の鋳造までしている。勢家の法専寺にいまも、駄ノ原の鋳物師安部利兵衛、植木平左衛門、安部善三郎、安部庄五郎、安部太郎次らによって貞享

三年（一六八六年）に製作された仏像がある。輪光背をおうた座像で高さ一・二メートル、台座約〇・六メートルのみごとなもの。駄ノ原鑄物師の技術を示す代表作といわれている。

また府内藩の記録によると、宝暦五年（一七五五年）に駄ノ原の鑄物師六郎兵衛、半右衛門、仁兵衛、源六、兵吉の五人が日向（宮崎県）佐土原の光照寺の本尊として六尺のアミ、タ仏を鑄造のため出向きたいと願い出ているし、享和元年（一八〇一年）には、半右衛門、六郎兵衛、七郎右衛門の三人が、中津の妙蓮寺の鐘を鑄造するため同地に出向きたいと願いを出している。このように府内駄ノ原の鑄物師は、他領まで招かれるほど名を知られていたのである。

溶鉱炉は、むろんいまのように完備したものではなく、燃料は木炭だから、強い火勢を維持するためにタタラ（ふいご）の巨大なものを使っていた。

カマの外側の土間に設けられた足踏み式のタタラは直径三メートルもあった。このタタラの両側に十人ぐらいずつ、真中に調子をとるものが一人か二人、総勢二十一、三人の女が足をかけて踏むのである。

このタタラ踏みの仕事に行くことを「吹き吹きに行く」といった。タタラが風を吹きつけることを、「吹く」といったことからタタラを「吹き」と呼び、その仕事も「吹く」といったのだった。熱気の中で激しい仕事をするのだから、よほどの元氣な婦人でないとやれない仕事だった。冬でも腰巻き一枚のはだかで、天井から下がった綱をにぎり、片足をタタラにかけ、調子をとるために声をそろえてうたった。この「吹き吹き歌」を先日王

子町の池辺イシさん（八七）と植木ナオさん（八四）から聞かせてもらった。

わしが思うようにお前さんが思や、ヤートセーヤートセー  
ひとり寝もせにや寝せもせん、エンヤラホーラ、エンエー  
嫁に行くとして駄ノ原にや行くな、ヤートセーヤートセー

昼は吹き吹き、夜バタ織る、エンヤラホーラ、エンエー  
あの子よい子じゃ、ばたもち顔じゃ、ヤートセーヤートセー  
きなこつけたら、なおよかる、エンヤラホーラ、エンエー

これは代表的な歌で、そのほか通行人があるたびに即興のヒヤカシ文句を歌にして投げかけた。だから若い娘はかなやの前を通るのをいやがった。また女が悪口をいうのを「吹きうど口」といっていた。

このタタラ踏みの日当が大正初年ごろ二十五銭だった。

かなやがまったく消えたのは大正十年。植木由太郎さんの店が最後だった。

## 楽しい行事

このあたりは庚申待ちという庚申の日の祭りや、正月十四日と十月十四日のお日待ちが組内で盛んに行なわれていた。いまでも一部の年寄り仲間には維持されている。

この民間行事は、なにも王子町付近に限ったものではないが、王子町は信仰に結ばれた堅いつながりが町内の親交や社会生活の中心をなしているような土地がらで、庚申祭りやお日待ちの

ほかに正月の星祭りだとか、四国八十八カ所の団体遍路だとかいった年中行事が、町内の約束ごとのように維持されていたようだ。

お互いの生活が豊かでもなく娯楽もない生活の中で、信仰に名を借りたこれらのささやかなついでがどれほど楽しく待たれる行事であったことか。いまでも、おじいさんや、おばあさんが、それらの思い出話を語ってくれるときは、にわかに雄弁になったり、大声で笑ったり、感動したりして、話すことだけで楽しさにひたっておれるような表情なのだ。

庚申待ちやお日待ちの夜は、組内の当番の家にみんなが集まった。白米のご飯がたかれ、おひらに盛ったゴボウやレンコン、コンニャクなどの、いわゆるおひら料理をつまんで、腹いっぱい白米のご飯を食べ、酒を飲み、そしてお経をみんななどとなえた。

疲れると、話じょうずが、あることないことを、おもしろおかしく話してみんなを笑わせた。中でも一番の人気者は、立川文庫などの講談本をうまく読んでくれる、読み手だった。

「三好清海入道は百貫にあまる鉄棒を水車のごとくふり回し、やあやあわれこそは…」とか「群らがる賊を、当たるをさいわい、つかんでは投げ、ちぎつては投げ…」といった式のを適当に声色を入れ、節おもしろく読むのだった。こんな読み手が一人加わると座はいよいよにぎわい、朝まで語りあかして、この次の祭りを楽しみに散っていった。

星祭りは、ふつうに「ももて（百手）祭り」と呼ばれるもので、鬼という字を書いた的を弓で射て悪魔をはらう民間の神事

だが、ここでは神事というより、町内の懇親会のようなかたちで維持されていたようだ。

この星祭りは、庚申祭りのように組内の老若男女の楽しいつどいではなく、ちゃんとした家柄の主人たちだけが、これに参加する資格があったのである。

王子町かいわいにはもうこの行事を維持するグループはなくなつたが、南大分には、まだ「ももて祭り」を大切に守り続けている地区があるらしい。

## お遍路さん

王子町かいわいには、成人になる前の青年男女が団体で四国八十八カ所遍路をする、他にはちよつとみられない行事があつた。

いま七十歳前後になつているおじいさんやおばあさんなら、たいていこのお遍路の楽しい思い出を胸にしまっているが、いつごろから始まったものか、どのような動機でするようになったのか、だれも知っている者はいない。明治の初め、あるいは、もつと前、このあたりにお大師さんを信仰する有力な人がいたか、あるいは有徳な僧がいて、成人になる前の一時期を、信仰に抱き合わせて旅の苦勞と団体協力の精神を養わせる目的で奨励したのだろう。

「いちど遍路に行つてこんと、一人前の顔ができんかつたものじゃ」

と、老人たちというのはのである。このように、土地の習俗とし

てしみこむまでにも、  
じじ、ばばから子へ孫  
へと長い長い申し送り  
があったのだろう。

灰色の冬が去って、  
畑の麦の青さが目立つ  
ようになると、若い者  
組の中に四国遍路への  
話題がぼつぼつ頭をも  
たげてくる。

ことし行く者はだれとだれじゃろうとか、だれは去年行けな  
かったから、ことしは是が非でも行くじゃろうといったような  
ことから、行くものは、だれとだれにきまった、というふう  
に固まってくる。家庭でも、親たちは、わが子の長旅のしたく  
にかかる。旅立つ者も仕事のことなど身の整理を始める。  
例年、十八、九歳の男女合わせて三十人前後の参加が普通だっ  
た。これを若い者組のリーダー格のひとりが引率した。

わらじばきに手甲きやはん、すげがさ、手回りの荷を肩にと  
いう軽装で、肉親に見送られて、カンタン港を船出。四国の八  
幡浜に上陸。あれから松山回りが順回り、宇和島回りが逆回り  
となる。その二コースのどちらかを選んで寺から寺へ遍路が始  
まるのだった。

道中行きかう人は必ず「ご苦労さん」と声をかけあった。宿  
につくと金剛づえを各自が洗って仏前にそなえておくといった  
厳しさや、およそ四十日の遍路中まったく精進料理を守り通す

お遍路さん



つらさがあった。

しかし、どこの村でもお遍路さんにたいしては親切だった。家の前に待っていて、お遍路さんにセンベイのような菓子か、チリ紙、モチあるいはお金を一銭お接待してくれる家があるなど、人々の暖かい人情にふれるうれしさや、若い者ばかりの気のおけない旅のおもしろさもあった。同行の女性の荷を持ってやるなどのいたわりから、恋も芽ばえるということもあった。帰路は佐賀関に上陸。ここに肉親が晴れ着を持って出迎えてきている。さらに長浜神社のところまで町内の人々が出迎えていて、長旅の苦勞をねぎらってくれた。

それから春日社、王子社、良福寺に帰着のお礼参りをして、はじめて家庭に落ち着くのであった。

このお遍路修業で芽ばえた恋が実って間もなく祝言をあげる者も幾組があった。

大正になって、若い者が四十日も旅に出ることを、職場でも許してくれなくなるなど、このようなおおらかな行事は存在を許されず、いつとはなく消滅した。いままも南王子町の家々の軒下にお大師さんをまつてゐるのは、お遍路行事のなごりだ。

## 大分ミカンの創始者

王子町一帯の古い家の庭に、ミカンの老木をよくみかける。あれが「大分ミカン」の創始に深いつながりをもっていることを知る人は少ない。

明治年代に岩田丑太郎さんという素封家が王子町にいた。産

業振興に非常に心をくだいた人で、駄ノ原地区の農家を、昔ながらの米、麦、アワ、サツマイモ作りの貧しさから抜け出させるには、ミカン栽培を奨励することだと考えた。明治二十年ごろのことだ。

丑太郎さんは、ミカンの産地和歌山にわざわざ出向いて、数回にわたってミカンの苗木を買いこんできた。おそらく、数千本の苗木ではなかったかといわれている。それを駄ノ原一帯の農家に配って植えさせた。

ところが当時の農家は、ミカン栽培にたいする理解がなかった。「何年先に実ができるかわからんもののために畑を遊ばせる」と、丑太郎さんの遠大な夢を押しつけられることを、迷惑に感じたのだった。数年先の収穫より、きょうのアワや麦が大切だったのだ。

こっそり苗木を抜いて捨てる人が、しだいに多くなった。丑太郎さんはそれを知って農家の人々にいった。

「畑にミカンを植えるのがいやなら、自分の家のまわりにでも植えときなさい。きっとわかるときがくる」

かくて丑太郎さんの夢は、一部は丸尾山付近に成長してしたが、ほとんどは宅地内栽培に縮小されてしまったのだ。そのときに農家のまわりに植えたものが、いまは老木となって、家々のこどもを年々喜ばせているわけである。

くだって明治の末に、七十二連隊が十分にきて、広大な農地をつぶしてしまった。この犠牲となって最も大きな打撃を受けたのは志手、椎迫の農家だった。そのとき新しく生きる道として、目をつけたのが、かつて丑太郎さんが駄ノ原の農家にす

めて植えさせたミカンだった。

田畑を失って追いつめられた志手、権迫の人々は必死だ。山地帯を開墾して積極的にミカン栽培に転じていった。そして数年後には好成績をあげるにいたった。これに刺激を受けて、駄ノ原側もようやく本気になってミカン作りに熱をあげるようになったのである。

昭和初年に、当時大分市の農会議員をやっていた王子町の植木栄助さんたちは、先進地津久見から専門家を雇ってきて、優良ミカンのつぎ木技術を指導するなど、大分ミカンの振興に力を入れている。かくて、今日の大分ミカンの黄金時代を迎えたわけだ。

いま中島造機の横からまっすぐに、丸尾山のミカン畑をたぬいている産業道路のかたわらに岩田丑太郎さんの顕彰碑が建っている。これは数年前に植木栄助さんらの発起で「大分ミカンの先覚者」丑太郎さんに感謝して建立したものである。

### 初めて飛んだ飛行機

王子神社の横から、大分大学学芸学部正門前に達する広い道路は、明治四十一年に七十二連隊ができたときに作った「連隊道路」である。

軍靴に踏み固められたあの通路も、戦後、学芸学部が連隊あとに移ってからは「大学通路」と平和な名で呼ばれるようになった。ところが近年は駅前から延びた「産業道路」が斜めに突っこんできたからたいへんだ。将来は「大学道路」を斜断して、ずっ



七十二連隊正門

とカンタンの方に延びるのだろうか、現状は「大学道路」が「産業通路」のつづきみたいになっているために、車の交通量がすごく多い。威風あたりをはらった歩兵の行進の場が、交通戦争の修ら場と変じたわけだ。

あの七十二連隊の練兵場で、初めて飛行機が飛んだときは、市内の人々の話題をさらった。

飛んだのは大正四年十月三十日と、十一月一日の二回だったが、その数日前から飛行機は連隊に運んであつて、好天を待っていたのである。

きょうは飛ぶだろう、あすは飛ぶだろうと、市民は待ちこがれているのだが、いっこうに飛びたつけない。毎日、練兵場までわざわざ出かけて行って「きょうもだめ」と確かめないと納得できない見物人が引きもきらなかつた。

風の穏やかな、絶好の飛行びよりでないと「壮拳」の決行ができないのである。

三十日に、さあ、きょうこそは飛ぶぞ、というわさが伝えられた。「世紀の壮拳」を見ようと駆けつけた見物人は、およそ三万人と伝えられているから、広い練兵場の周囲

は見物人で埋められたわけだ。

飛行機は、いまは航空史の本などに描かれている複葉単座のもっとも原始的なもので、飛行士の座席も、露出したままだった。

発動機は、現在模型エンジン機を飛ばすときにみられるように、プロペラを人力で回転させ、そのはずみで発動させる、あのやり方だ。幾度も幾度も、ブルンブルンとやったあげく、ようやく回転を始めた。

しかし、そのままずっと発進するのではなく、数人の若者が、飛行機の前方に並んで足をふんばり、翼を押えていた。プロペラの回転速度がじゅうぶんになるまでは前進させないのだ。

いよいよ機が熟して、機上から合図が送られ、翼を押えていた人々がいつせいに手を離して翼の下に伏せた。ワァッとあがった見物人の歓声の中に、滑走する飛行機は、ふわりと地上を離れた。市内上空を数分間飛んだだけだが、大分で初めて飛行機が飛んだ、まさに歴史的な興奮の数分間であった。

飛行士は民間飛行家の高左右（たかそう）某と記録されている。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

## デジタルブック版「大分今昔」 第十六章 ●王子町かいわい

2007 年 11 月 30 日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

### 著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。